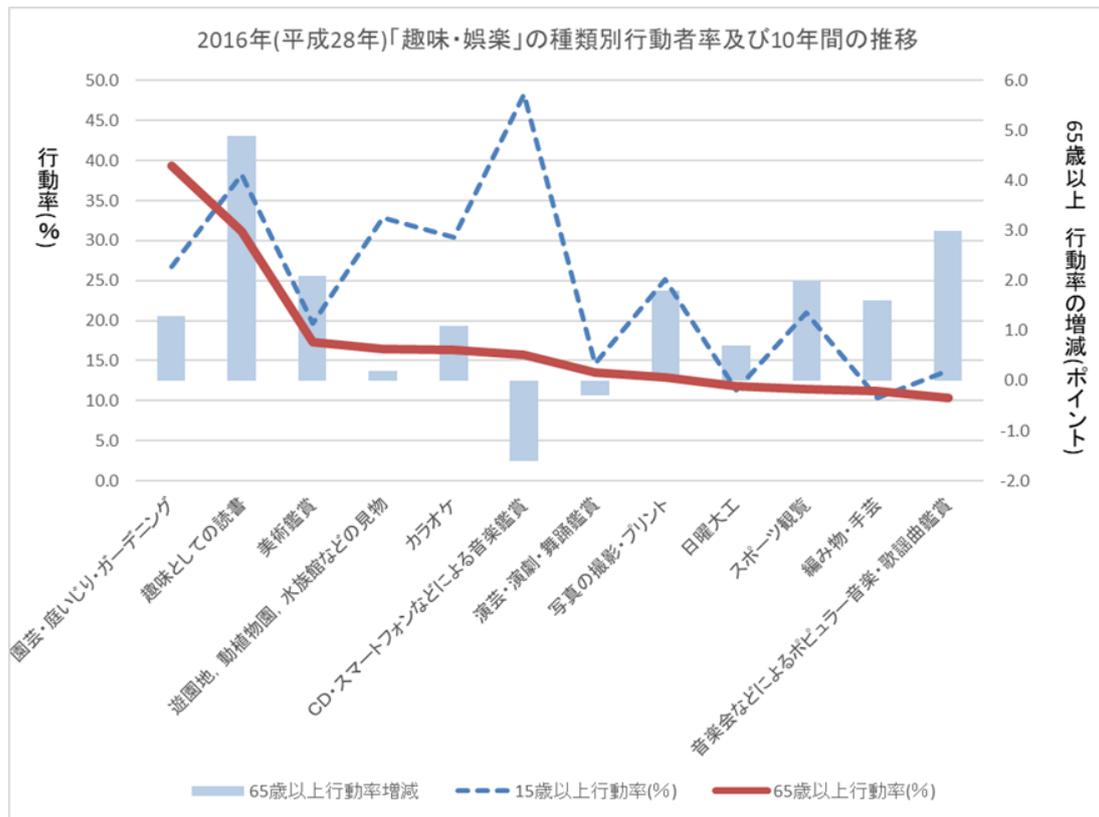


2016年(平成28年)「趣味・娯楽」の種類別行動者率が示唆する 近未来における障害高齢者の生活のイメージ



出典：総務省統計局 平成28年社会生活基本調査より筆者作成
(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/index.htm>)

テレビ番組では高齢者が山奥に移住し、元気に暮らしている様子が放送され、その年齢に驚くことも多い。高齢者の体力は1992年に比べ2002年では65歳以上の高齢者の体力指標について、握力では男性で4歳、女性で10歳若返ったとしている¹⁾。また、高齢者の就業者は13年連続で増加し、770万人を超えている。近年の高齢者の生活は確実に変化している。

上記グラフが示しているのは社会生活基本調査における「趣味・娯楽」の種類別行動者率について2016年の調査結果から65歳以上の行動率10%以上の行動を抽出し10年間の変遷を示したものである。調査項目のうち「映画鑑賞」の行動率は13.5%となっていたが、調査内容に変更があり比較できないため除外した。

社会生活基本調査は統計法に基づく基幹統計であり昭和51年以来5年ごとに実施されている。国民の社会生活の実態を明らかにするための基礎資料として実施され、生活時間の配分や余暇時間における主

な活動の状況などについても調査している。調査対象者は2001年(平成13年)以降、10歳以上約19万人となっている。

何らかの「趣味・娯楽」を行った高齢者は2433万人、高齢者人口に占める割合(以下、行動者率)は76.1%で、前回調査より4.0ポイント上昇している。最も多いのは「園芸・庭いじり・ガーデニング」で2016年(平成28年)では約40%に達している。この傾向は2006年(平成18年)以降変化がなく高齢者の趣味として定着していることが推察される。一方で上記項目の中で行動率が低下しているのがCD・スマートフォンなどによる音楽鑑賞である。高齢者は音楽への興味がなくなっているのだろうか。

しかし、音楽会などによるポピュラー音楽・歌謡曲鑑賞の行動率をみると、この10年間一貫して向上している。このことは受動的な音楽鑑賞より、外出しより直接的に音楽を楽しもうとしている高齢者が増加していることを示している。このように、高齢者の行動状況は趣味行動の活動率の向上による量的な変化と受動的な活動から能動的な活動へと質的な変化があり、高齢者はより能動的な活動を選択していることが示唆される。

本調査は障害の有無による分析は行われていない。しかし、障害があっても普通の生活を送る、つまり高齢者のノーマライゼーションを実現するためには、より能動的に活動する生活をイメージすることが重要であろう。能動的な活動や就業は高齢者の余命を延伸する効果がある²⁾。障害があっても、ガーデニング等では植える場所や植え方時期などを自ら計画し、手入れを行うこと、音楽では演奏会に行く、自身が演奏するなど主体的に楽しむことなど能動的に活動することに加え、その人に合わせて働くこともより能動的な活動の選択肢となりうるのではないだろうか。

近年、「終活」という言葉が高齢者の間で注目されている。しかし、近未来の高齢者においては障害があったとしても、能動的に活動し、働く意欲と必要性に応じて「就活」が必要な時代なのかもしれない。

引用文献

- 1) 鈴木隆雄, 権珍嬉: 日本人高齢者における身体機能の縦断的・横断的变化に関する研究—高齢者は若返っているか?—, 厚生の指標, 53(4): 1~10, 2006.
- 2) 早坂ら: 在宅要援護高齢者の主観的健康感に影響を及ぼす因子, 厚生の指標, 49(15): 22~27, 2002.

●当レポートは、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。当レポートのご利用に際しては、ご自身の判断にてお願い申し上げます。また、当レポートは執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。なお、当レポートに記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当レポートは著作物であり、著作権法に基づき保護されています。当レポートの全文又は一部を著作権法の定める範囲を超えて無断で複製、翻訳、翻案、出版、販売、貸与、転載することを禁じます。